

「若者の自立を支援する
15日間のチャレンジキャンプ」
～一歩を踏み出す！自分に挑戦！～

平成24年9月1日（土）～15日（土）14泊15日



I 事業の背景（必要性）

平成21年に内閣府が行った初のひきこもり全国実態調査（15～39歳対象）では、ひきこもり状態にある若年者が約70万人と推計されることや、ひきこもりになったきっかけとして、「職場になじめなかった」「就職活動がうまくいかなかった」「人間関係がうまくいかなかった」などを報告している。

このようなことから、ニート、ひきこもり、不登校といわれる若年者の自立心や忍耐力、コミュニケーション能力を高めるため、共同生活体験、労働体験、自然体験を通じて、社会人として必要な基本的能力の獲得や勤労観の醸成、自信と意欲を高め就労へ導くことを目的として本事業を企画した。

II 事業の概要

1. 趣旨

- （1）長期間、仲間と寝食を共にした共同生活や、共同作業による労働体験を行いながら、社会人、職業人に必要とされる自立心やコミュニケーション力を築く。
- （2）2泊3日の富士登山を体験することで、困難を乗り越える自信をつける。
- （3）15日間を終えてからは、来年3月まで数ヶ月ごとに集まり、参加者の自立を継続的に支援する。

2. 参加者

（1）対象

ニート、ひきこもり、不登校の状態にある若者（16～30歳）

（自宅からは出られるが、家族以外との対人関係に不安がある若者や、自分に自信がなかったり、コミュニケーションをとることに自信がなくて定職についていない若者など）

（2）募集人数

10名

（3）参加状況

<年齢>

	男性	女性	合計
20～23歳	1	1	2
24～26歳	1	0	1
27～30歳	2	0	2
合計	4	1	5

<参加地域>

	男性	女性
静岡県	1	1
愛知県	1	0
山梨県	1	0
栃木県	1	0
合計	4	1

(4) 広報の方法

- ① 募集チラシを作成
- ② 若者支援団体に、募集要項と募集チラシを郵送 約 270 団体
- ③ 報道関係各社に掲載依頼 約 50 社
- ④ 静岡県教育委員会社会教育課主催「民間支援団体と公的支援機関，高等学校等による合同相談会&講演会」において説明（三島，浜松，静岡）

3. 日 程

(1) 一日の生活

6:00	7:00	9:00				16:00	18:00	20:00		22:00
起床	朝食		午前の活動	昼食	午後の活動		夕食		ミーティング	就寝

(2) 全体日程

日	曜	午前	午後	夜
1	土		集合・オリエンテーション	係・役割分担について
2～4	(日)(火)	野菊寮 (ペンキ塗り・清掃・入所者との交流)		夕食準備 入浴 一日の振り返り ミーティング
5	水	宝永山ハイキング		
6～8	(木)(土)	かつまた牧場 (乳牛の世話・牛舎清掃・農作業)		
9	日	野外炊事・レクリエーション		
10	月	登山について	登山準備	
11	火	富士登山第1日 (村山浅間神社～富士山麓山の村)		
12	水	富士登山第2日 (富士山麓山の村～宝永山荘)		
13	木	富士登山第3日 (宝永山荘～富士山頂～下山)		
14	金	後片づけ・登山予備日		
15	土	後片づけ	解散	

4. 内 容 (活動の様子)

(1) 事前説明会・面談

- ① 期日 8月26日(日) 14:00～17:00
- ② 場所 中央青少年交流の家 研修室
- ③ 参加者および保護者に、事業目的、日程、活動内容について説明会を設けるとともに、家庭環境や健康状態について把握するため、個別の面談を行った。交流の家での生活を知らせてもらうため、事業説明と面談終了後は、施設内の見学を行った。

(2) 9月キャンプ

- ① 野菊寮
 - ア 知的障害を持つ方々が生活する施設で、作業小屋の屋根のペンキ塗りを行った。個人の作業から始まったが、ペンキの受け渡しや脚立の支持など、協力を得なければな

らない作業を行うことで、徐々に会話やコミュニケーションが増えてきた。また、毎日の作業量を目にすることができ、達成感を味わうことができた。雨天時には、体育館の床ふきや入所者が生活する棟のガラスふきなどをおこなった。



イ 他者への思いやりを深めるため、野菊寮の行事に参加し、入所者とフォークダンスの交流会を行った。

② 宝永山トレッキング

ア 富士登山に向けて、気温や天候などの山岳環境を体験するため、六合目付近のトレッキングを行った。

イ 実際に登山準備をしてトレッキングを行い、装備に不備がないかを確認した。

ウ トレッキングを行うことで、各自に富士登山の目標を確認することができた。

③ かつまた牧場

ア 役割分担と共同作業の大切さを知るため、牛舎の清掃、乳牛への餌やり、サイロへの飼料の詰め込み作業などを、参加者が交代して行った。

イ 飼料用とうもろこしの伐採など農作業を行うことで、自然環境の中で働く充実感を味わった。

ウ 家族経営の牧場であることから、乳牛の世話などの作業が直接生活に結びつくため、労働の真剣さを体験することができた。

④ 富士登山

ア 困難を乗り越える意志を培うため、2泊3日の富士登山を行った。

イ 自己の達成目標を明確にするため、登山実施前に面談を行い、富士登山の意識づけを行った。

ウ 第1日は、富士宮浅間神社を出発し、富士登山道最古といわれる村山古道を経て、静岡県立富士山麓山の村までの行程を歩いた。第2日は、富士山麓山の村から宝永山荘まで、第3日は、宝永山荘から富士山頂を目指した。登頂後、宝永山荘に下山し、交流の家に戻った。



エ 他者を気遣う意識を高めるため、歩行ペースを遅い人に合わせたり、グループ分けをして山頂を目指した。

④ 共同生活

ア 自活意識を高めるため、三食自炊の生活を行った。また、責任感を持つため、毎日の食事や清掃などを交代制で行った。

イ 規則正しい生活習慣を身に付けるため、起床から就寝までの時間を示し、それに従って生活した。

ウ 自己を振りかえる機会として、毎日ミーティングの時間を設けた。



エ 悩みや本音を話しやすくするため、参加者とスタッフが個別に面談できる時間を確保した。

5. 評価

(1) 評価の方法

- ① 事業終了後に、参加者にアンケートを実施した。
- ② 生活日誌を毎日記入し、生活リズムや行動や心の変化のようすを記録した。

(2) 結果

① アンケートの集計結果

質 問 の 項 目	とてもそう 思う	まあまあそ う思う	あまりそう 思わない	まったくそ う思わない
プログラムについての満足度	3	2	0	0
運営についての満足度	2	3	0	0
この期間に生活習慣を改善することができましたか	1	4	0	0
自立に向けてのきっかけとすることができましたか	2	1	2	0
文章や発言による自己表現ができましたか	2	1	1	1
困難を乗り越える自信ができましたか	3	2	0	0
他者とのコミュニケーションをとることができましたか	2	2	1	0
自己の目標は達成できましたか	4	1	0	0
当教育事業全体を通した満足度はどのくらいですか	2	2	1	0

② アンケート記入の感想

- ・早起きをし、清掃、朝食準備をすることで、生活リズムが整った。
- ・様々な人がいることを教えてくれる良いきっかけになった。この事業がなかったら、「私だけ取り残されているのだ」とふさぎ込んでいたと思う。
- ・普段体験できないことを通して、人との交流で視野が広がり、この先がんばろうと思う。
- ・富士山という他にはない魅力がある施設であるので、全国から参加者を集めたほうが良いと思う。こういった合宿方式のプログラムを探し当てている人は大勢いると思うので、今後も是非継続して頂きたい。

Ⅲ 事業の企画と運営

1. 企画のポイント

- (1) 参加募集年齢を絞り込み、年齢層を近くすることで、コミュニケーションのとりやすい環境作りを図った。
- (2) 前年度まで30日間で実施してきたが、10日を過ぎた頃から、生活リズムの変容が見られたり、悩みや心情を表現できたりしたことから、本年度は15日間として実施した。
- (3) 15日間の共同生活終了後は、数ヶ月ごとに集まる機会を設け、その後の生活の見直しや、自立に向けての目標の再確認、また、活動に向けての支援を行う。
- (4) 参加者の集まる機会を複数設けることで、変容と活動の追跡調査を行う。

2. 運営のポイント

- (1) 個別面談の時間を、ワークの区切りに合わせて、5日目と9日目の夜に設けた。参加目標の再確認を行うとともに、悩みの相談や自己内面を発現する機会とした。また、最終日前日にも設定し、キャンプ生活終了後の行動目標を与える機会とした。
- (2) スタッフ主体の指導から始め、徐々に参加者相互の働きかけによる共同作業や生活を作り上げた。
- (3) 所内での活動日の内容や、最終日に行ったまとめの発表会などは、参加者主体で計画させ、受け身の活動にならないようにした。
- (4) 意欲のある参加者には、まとめ役を任せるなど、参加者のモチベーションを落とさないようにした。

3. 指導のポイント

- (1) 毎日の生活日誌を記入し、スタッフや参加者同士の声かけのようすや、活動をとおして意欲の湧いた内容を記入することを行った。
- (2) 睡眠や疲労度などを日誌に記入し、心身の変化のようすを探るとともに、翌日の活動の参考にした。

4. 成果と課題

(1) 成果

- ① 前年度は、静岡県内からの参加者のみだったが、県外（愛知県，山梨県，栃木県各1名）から3名の参加者を迎えることができた。
- ② ワークを継続して行うことで、就寝時間が早くなり、睡眠時間が徐々に増え、生活のリズムできあがっていった。
- ③ 個人の面談を行ったことで、「目標を再確認できた。それをきっかけに自分の過去を話せるようになった」という、参加者の感想があった。
- ④ 当日の活動や対人関係の様子を日誌に書くことで、日々の振りかえりとこれからの行動について目標を持つことができた。
- ⑤ 企画者側として、日誌の記入は、気持ちの変化や参加者間の関わりについて知ることができた。
- ⑥ 生活習慣の改善，富士登山を目標にした困難の克服，キャンプにおける自己の目標達成は、スタッフが個別に支援したことがあって、満足度が高い結果を得ることができた。

(2) 課題

- ① 職員では分からない専門的な知識を有するカウンセラーがスタッフに加わり、病的傾向の有無など、適切な判断とアドバイスが受けられる体制を作ること。また、参加者が気軽に相談に乗れる体制を整えることが必要である。
- ② 女性スタッフを加えることができなかった。男女のスタッフを加え、どちらにも配慮が行える配置を行うこと。
- ③ 参加者の持つ様々な課題に対応するため、個別支援ができる経験豊かなボランティアを募集すること。
- ④ 若者サポートステーションやヤングジョブステーションなど、県内外にある若者支援団体に、共同宿泊による効果を広報し、施設利用や団体間の連携を高めていくこと。

5. 参考資料

(1) 参考文献やサイト

厚生労働省 「ニートの状態にある若年者の実態及び支援策に関する調査研究」
<http://www.mhlw.go.jp/houdou/2007/06/h0628-1.html>

(2) 資料

- ①実施要項
- ②アンケート用紙
- ③生活日誌

担当：加藤英樹, 望月 奏